

## 「非常に大勢の人々」

マルコの福音書 3:7~8

### はじめに

今日の箇所はイエシュアのみもとの、様々な地方から非常に大勢の人々が集まって来るという出来事を描いた場面です。これだけでもすでに神の国とはこのようなものであること、すなわちイエシュアを中心とした、イエシュアによって集められる者たち、それが神の国であることが「型」たたとえとして表されているような箇所です。そしてこれをヘブル語の視点で捉えていきますと、神のご計画について更に詳しい情報を得ることができ、私たちの目を、心と思いを神の国に向けさせてくれるものとなります。早速見てまいりましょう。

### 1. 湖に退く

【新改訳 2017】 マルコの福音書

3:7 それから、イエスは弟子たちとともに湖の方に退かれた。すると、ガリラヤから出て来た非常に大勢の人々がついて来た。

まず「イエスは弟子たちとともに湖の方に退かれた」という出来事について考えてみたいと思います。ヘブル語ではこの「湖」もまた海もともにヤーム(ים)という言葉を使います。この言葉が聖書で最初に使われたのは創世記 1:10 です。

【新改訳 2017】 創世記

1:9 神は仰せられた。「天の下の水は一つの所に集まれ。乾いた所が現れよ。」すると、そのようになった。

1:10 神は乾いた所を地と名づけ、水の集まった所を海と名づけられた。神はそれを良しと見られた。

神は天地創造の第三日に「天の下の水は一つの所に集まれ。」と仰せられ、そしてこれにヤームという名をつけられました。ですから「湖」と訳されたヤームには本来、神の御言葉によって天の下に集められたものという意味があると考えられます。このように、神の国とは御言葉に聞き従う者たちが神によって集められることによって建て上げられる国であることを示すために、イエシュアは山でも神殿でも荒野でもなく、あえてこのヤーム「湖」に退かれたのだと考えられます。またこの「退かれた」と訳された言葉はヘブル語ではスール(יָסַד)と言い、創世記 8:13 にこの最初の言及があり、本来は水が地面から干上がって乾くことを意味する言葉です。

【新改訳 2017】 創世記

8:13 六百一年目の第一の月の一日に、水は地の上から干上がった。ノアが箱舟の覆いを取り払って眺めると、見よ、地の面は乾いていた。

この記述はかつて全世界を水没させた大洪水とそれを生き延びたノアの箱舟の物語の一場面ですが、ここで「**水は地の上から干上がった。**」と訳されている箇所には聖書で最初のスールがあります。御存知のように水は温められると蒸発して液体から気体となって空中に舞い上がり、雲や大気となります。ですからこの「**退かれた**」と訳されたスールには本来、**地を離れること、つまり天に上る**という意味があると考えられます。つまり「**イエスは弟子たちとともに湖の方に退かれた**」という出来事には、イエシュアは弟子たちを集め、そして天に上られるという神のご計画が表されていると考えられます。この出来事はイエシュアが再びこの地上に帰って来られる「地上再臨」のその前に起こる、イエシュアの「空中再臨、空中携挙」を指し示していると考えられ、Iテサロニケ人への手紙 4:16~17 にその詳細が記されている出来事であると考えられます。

【新改訳 2017】 Iテサロニケ人への手紙

4:16 すなわち、号令と御使いのかしらの声と神のラッパの響きとともに、主ご自身が天から下って来られます。そしてまず、キリストにある死者がよみがえり、

4:17 それから、生き残っている私たちが、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会うのです。こうして私たちは、いつまでも主とともにいることとなります。

## 2. ガリラヤ

イエシュアと弟子たちが湖の方に退かれると、そこにまず大勢の「ガリラヤ」の人々が集まって来たことが記されています。ガリラヤ(גליל)は「周囲、周辺 (の地域)」という意味であり、「回す、転がす」という意味のガーラル(גלל)という動詞がその語源であると考えられます。この最初の言及は創世記 29:3 です。

【新改訳 2017】 創世記

29:3 群れがみなそこに集められたら、その石を井戸の口から**転がして**、羊に**水を飲ませ**、その石を再び井戸の口の**元の場所に戻す**ことになっていた。

これはヤコブすなわち後のイスラエルが、故郷を離れ東の国へ行った時の一つの出来事ですが、彼はそこに一つの井戸と羊の群れを見ます。その井戸のふたの「**石を井戸の口から転がして**」という箇所には聖書で最初のガーラルがあります。この井戸の石をガーラル、転がす理由、それは羊の群れを「**集め**」、「**水を飲ませ**」するためです。そして石を再び「**元の場所に戻す**」ことが記されています。ですからこのガーラルには**羊を集め、水を飲ませ、元に戻す**という意味があると考えられます。神はイエシュアによってご自分の民であるイスラエルを集め、これに永遠のいのちを与え、かつてエデンのような世界へと、元に戻す、回復しようとしておられます。そのご計画がこのガリラヤの語源であるガーラルという言葉の中に表されていると考えられます。このように「**湖の方に退かれた**」イエシュアのみもとに最初に集まって来たのがガリラヤの人々であったことは地理的に近かったからというだけではなく、その名前に神のご計画についての最も重要な情報が示されているからだと考えられます。

### 3. ユダヤ

【新改訳 2017】 マルコの福音書

また、ユダヤから、

3:8 エルサレムから、イドマヤから、ヨルダンの川向こうや、ツロ、シドンのあたりからも、非常に大勢の人々が、イエスが行っておられることを聞いて、みもとにやって来た。

次に「ユダヤ」(יְהוּדָא)地方からも人々が集まって来ました。この名前は「ほめたたえる、賛美する、感謝する」という意味の動詞ヤーダー(יָדָה)が語源となっています。最初の言及は創世記 29:35 です。

【新改訳 2017】 創世記

29:35 彼女はさらに身ごもって男の子を産み、「今度は、私は【主】をほめたたえます」と言った。それゆえ、彼女はその子をユダと名づけた。その後、彼女は子を産まなくなった。

これはヤコブすなわちイスラエルの妻レアが四男ユダを産んだ場面ですが、ここで彼女が「【主】をほめたたえます」と言っている箇所が聖書で最初のヤーダーです。ここでのレアは喜びに満ちているように見えますが、長男のルベンを産んだ時はこれとは全く逆の状態でした。なぜなら夫ヤコブは、彼女ではなくもう一人の妻であり彼女の妹でもあるラケルの方を愛していたからです。その嘆きと悲しみの中でレアは長男ルベンを産みます。しかし四男のユダを産んだ時、彼女の心は喜びに満たされ、神へのヤーダー、感謝と賛美へと変えられたのです。ですからこのヤーダーという言葉は本来、嘆きと悲しみが前提となっており、それが喜びへと、神への感謝と賛美へと変えられることが表された言葉であると言えます。

そして「その後、彼女は子を産まなくなった」とあります。これは直訳すると「産むことをとどまらした」となり、「とどまる、立つ、耐える」という意味の動詞アーマド(אָמַד)が使われており、この言葉は本来、アブラハムが神を食卓に招いてもてなした出来事に起因し(創世記 18:8)、神のみそばに立ち、とどまり、仕えるという行為を表しています。神は今日もなお離散と迫害による嘆きと悲しみの中にあるイスラエルの民を再び集め、そしてご自分の所有の民として回復させ、このレアに表されたように、嘆きから喜び、神への感謝と賛美へと変えようとしておられます。そしてこの民をご自分のみそばに立たせ、仕えさせようとしておられます。それがこの「ユダヤ」の語源であるヤーダーに示された神のご計画であり、ここにその名が記されている理由であると考えられ、また今日もこのイスラエルの民がユダヤ人と呼ばれる理由ではないかと考えられます。

### 4. エルサレム

ガリラヤ、ユダヤの人々に続き「エルサレム」(יְרוּשָׁלַיִם)からも人々が集まって来ました。この町はもともとサレム(שָׁלֵם)と呼ばれ、創世記 14:18 にその最初の言及があります。

【新改訳 2017】創世記

14:18 また、サレムの王メルキゼデクは、パンとぶどう酒を持って来た。彼はいと高き神の祭司であった。

14:19 彼はアブラムを祝福して言った。「アブラムに祝福あれ。いと高き神、天と地を造られた方より。

「サレムの王メルキゼデク」、ここに聖書で最初のサレムが記されています。このサレムの王はイスラエルの父祖であるアブラムに「パンとぶどう酒」を与え「いと高き神」の祝福を与えた人物として記され、ヘブル人への手紙 7:1~4 には更にこう記されています。

【新改訳 2017】ヘブル人への手紙

7:1 このメルキゼデクはサレムの王で、いと高き神の祭司でしたが、アブラムが王たちを打ち破って帰るのを迎えて祝福しました。

7:2 アブラムは彼に、すべての物の十分の一を分け与えました。彼の名は訳すと、まず「義の王」、次に「サレムの王」、すなわち「平和の王」です。

7:3 父もなく、母もなく、系図もなく、生涯の初めもなく、いのちの終わりもなく、神の子に似た者とされて、いつまでも祭司としてとどまっているのです。

7:4 さて、その人がどんなに偉大であったかを考えてみなさい。族長であるアブラムでさえ、彼に一番良い戦利品の十分の一を与えました。

このように、サレムすなわち「エルサレム」が神の御子、メシアであるイエシュアを指し示していることは明白です。そしてイエシュアがアブラムの子孫であるイスラエルを治める王となることが、この名前に示された神のご計画であると考えられます。つまり神の国は、ただイエシュアが再び地上に来られるだけでも、イスラエルが祝福されるだけでもなく、**イエシュアがイスラエルの王となることが重要であり、完成と言える出来事であることがここに示されていると考えられます。**

## 5. イドマヤ

次に「イドマヤ」(יִדְמָא)の人々について。この地名はヤコブ（イスラエル）の双子の兄エサウの子孫であるエドム人から来るものですが、このエドムとは「赤い」という意味であることが、その最初の言及である創世記 25:30 に記されています。

【新改訳 2017】創世記

25:29 さて、ヤコブが煮物を煮ていると、エサウが野から帰って来た。彼は疲れきっていた。

25:30 エサウはヤコブに言った。「どうか、その赤いのを、そこの赤い物を食べさせてくれ。疲れきっているのだ。」それで、彼の名はエドムと呼ばれた。

25:31 するとヤコブは、「今すぐ私に、あなたの長子の権利を売ってください」と言った。

25:32 エサウは、「見てくれ。私は死にそうだ。長子の権利など、私にとって何になろう」と言った。

25:33 ヤコブが「今すぐ、私に誓ってください」と言ったので、エサウはヤコブに誓った。こうして彼は、自分の長子の権利をヤコブに売った。

このように、エドムという言葉には本来、アブラハムの子イサクの二人の息子である、兄エサウが弟ヤコブに長子の権利を売ったこと、すなわちヤコブが長子となった出来事が示されているのです。これはつまりヤコブすなわちイスラエル、そしてその子孫が、全ての国々の民の長子となることが示されたものであると考えられ、この「イドマヤ」という名もまた神のご計画の完成である神の国においてイスラエルの民が、どのような存在となるかを表したものであると考えられます。

## 6. ヨルダン

さらにイエシュアのみもとに「ヨルダン」(יַרְדֵּן)川の向こう岸からも人々が集まって来ました。このヨルダンという名は「降りる、下る」という意味の動詞ヤーラド(יָרַד)が語源となっていると考えられ、その最初の言及は創世記 11:5 にあります。

【新改訳 2017】創世記

11:5 そのとき【主】は、人間が建てた町と塔を見るために降りて来られた。

11:6 【主】は言われた。「見よ。彼らは一つの民で、みな同じ話しことばを持っている。このようなことをし始めたのなら、今や、彼らがしようと企てることで、不可能なことは何もない。

11:7 さあ、降りて行って、そこで彼らのことばを混乱させ、互いの話しことばが通じないようにしよう。」

11:8 【主】が彼らをそこから地の全面に散らされたので、彼らはその町を建てるのをやめた。

11:9 それゆえ、その町の名はバベルと呼ばれた。そこで【主】が全地の話しことばを混乱させ、そこから【主】が人々を地の全面に散らされたからである。

バベルの民が建てようとした塔は、自分たちが神のようになろうとした行為でした。ですから神はヤーラド、「降りて来られ」この計画をやめさせました。ですからヤーラドには本来、人の計画をやめさせるために地に降りて来られるという意味があると考えられ、つまりこれはイエシュアが地上に再臨される出来事を指し示した言葉であると考えられます。イエシュアの目的は、人の計画ではなく、神のご計画だけを実現させることです。それがこの「ヨルダン」という地名に表されたメッセージであると考えられます。

## 7. ツロ

「ツロ」(צֹר)というこの町の名には「火打石 (の小刀)」という意味があり、これは「割礼」を指し示す言葉です。

【新改訳 2017】出エジプト記

4:24 さて、途中、一夜を明かす場所でのことだった。【主】はモーセに会い、彼を殺そうとされた。

4:25 そのとき、ツイボラは火打石を取って、自分の息子の包皮を切り取り、モーセの両足に付けて言った。「まことに、あなたは私には血の花婿です。」

4:26 すると、主はモーセを放された。彼女はそのとき、割礼のゆえに「血の花婿」と言ったのである。

これはモーセが「割礼」を受ける出来事です。ここに聖書で最初のツロ「火打石」があります。モーセはイスラエル人でしたが、エジプト人の王子として育てられたためにこの「割礼」という儀式を受けていませんでした。ですから神の預言者としてイスラエル人のもとに遣わされる際、このような形でしたが「割礼」を受けさせられたのです。この「割礼」についてもう少し説明しておきたいと思いますが、この儀式は神とイスラエルの父祖であるアブラハムの間に交わされた契約を示すものであり、詳しくは創世記 17:10~14 に記されていますが、解りやすく言うならばアブラハムの子孫イスラエルの民の一人に加えられるための儀式であり、たとえ異邦人であっても、これを受けるならばイスラエル人となることを意味するものです。モーセは無割礼であったために、妻ツイボラの気転がなければ、危うく殺されるどころでした。ここに神の国の真理が表されていると考えられます。すなわち神の国の民はみな、イスラエルに繋がる、従うことによって生かされるということです。それが「ツロ」という名前の中に表された、神の国についての情報であると考えられます。

## 8. シドン

そして最後に「シドン」(שִׁדּוֹן)という名について。「獵師、狩人」という意味を持つツアイド(צַיִד)がその由来であると考えられます。

【新改訳 2017】創世記

10:9 彼は【主】の前に力ある狩人であった。それゆえ、「【主】の前に力ある狩人ニムロデのように」と言われるようになった。

これは地上で最初の権力者となった「狩人ニムロデ」についての記述です。ここに聖書で最初のツアイドがあります。彼は「【主】の前に力ある狩人であった」と呼ばれました。ですからツアイドには本来、神の御前に立つ権力者という意味が示されていると考えられます。ですからここに「シドン」という名が記された理由として、神の国においてイスラエルの民が、神の御子であるイエシュアの御前で地上の全ての国々の民を統治、支配するということを指し示すためであったと考えられます。このように、神の国は誰もが平等で自由に好き勝手に生きる世界ではなく、イスラエルという、神に選ばれた存在に権力が与えられ、全ての人々がそれに従うことで秩序と平和が保たれる世界であるということです。

## 9. 現実

以上、今日の出来事の中に記された地名、そこに表された神のご計画、神の国についての情報について述べました。表にまとめると以下のようになります。

名称・語句	語源	最初の言及	神のご計画
湖	ヤーム	創 1:9-10	イエシュアの空中再臨、空中携挙
退く	スール「干上がる」	創 8:13	
ガリラヤ	ガーラル「転がす」	創 29:3	イスラエルを集め、永遠のいのちを与え、再建する
ユダヤ	ヤーダー「賛美する」	創 29:35	イスラエルの民の嘆きを賛美に変える
エルサレム	サレム	創 14:18	イエシュアがイスラエルの王となる
イドマヤ	エドム「赤い」	創 25:30-33	イスラエルが全ての国々の長子となる
ヨルダン	ヤーラド「下る」	創 11:5-9	イエシュアが地上に再臨し、人の計画を終わらせる
ツロ	ツロ「火打石」	出 4:24-26	全ての国々の民はイスラエルに倣い、これに従う
シドン	ツアイド「狩人」	創 10:9	イエシュアの御前でイスラエルに権威が与えられる

今日の内容も「イエシュアのみもとに近隣に住む大勢の人々が集まって来た」というような、日本語に訳された文章としてただ読むだけならば、それはただの状況説明として処理されてしまうような出来事であり、それだけでは神の御言葉、福音とは言い難いものです。しかしヘブル語の持つ、その本来の意味で読み解くならば、このように神のご計画についての情報満載の良い知らせ、まさに福音の御言葉となります。私たちはもっともこのような神からの、そのご計画についての情報に耳を傾けていく必要があります。もしそのことをしないならば、私たちはそれ以外の情報と知識、つまり神からのものでない情報、すなわち虚しい空想話や偽りの情報、神に頼らないで生きようとする知識などに耳を奪われ、心を奪われ、その影響を受けていくこととなります。今のこの時代は私たちの今の肉体と同様、やがて朽ち果てて終わっていきます。しかしその後にはやってくる、実現する世界は永遠に続く神の国です。これに比べれば今の時代は一瞬で過ぎ去っていくような、まるで影や幻のようなものであることを知ってください。神は確かに存在され、そしてご計画を持ち、その完成に向けて着実に時を進めておられます。永遠に続く神の国、これこそが現実です。私たちはもっとこの現実に目を向け、耳を傾けましょう。どうか一人ひとりに、神からの真理を、御言葉を解き明かす御霊の助けがありますように。